

敬愛讀本

長戶路政司

敬愛讀本

長戶路政司

敬愛之人



敬 天 愛 人

西 鄉 南 洲 曹

## 序

世に教育ほど神聖にして重大なるものはあるまい。殊に、十代の青年子女は、品性の陶冶、人格の基礎、身體の鍛錬、理想の發芽等、皆孰れもその緒に就くの時なれば、其の啓發訓化の宜しきを得るご否ごは、直ちに其の子女の人間としての生命を決定する大問題である。而して、人格品性を直接陶冶するものは、主として修身科に俟つがゆゑに、これが教授には最善の力を盡さねばならぬ。

是を以つて、修身科は概ね學校長自ら其の衝に當つて居るが、近時、大いに憂ふべきことには、一般學生が修身科に對する興味を失ひ、中にはこれを嫌忌し、甚だしきは輕侮の念を抱く者すらある。蓋し、這是學校教育が社會構成の一分科として組織化し、而して生命なき組織は漸次形式化す

ることによつて起れる弊にはあらざるなきか。即ち、今日の學校教育は建築物としての學校を中心とし、教師はこれに従屬する一機關に過ぎざる觀なきか。一學校に永く留りて一意教育の聖業に没頭せんよりは、轉々異動して自己一身の榮達を計るを尙勝れりとするに由るなきか。教育行政の局に當る者も亦人事異動の按配に腐心するを事務の主要部分とせるが如き謗なきか。かるが故に、往時の師弟の間に於ける情誼の如きは、今日の教師と生徒との間には極めて稀薄にして、教師は單に職業として生徒に智識を授け、生徒、唯義務としてこれを受く。教師に生徒を感化開發するの熱誠乏しく、生徒も亦師の教へに感激する者が少ない。斯の如くして、學校教育とは單に智識の賣買取引所に止まり、人格修養、品性陶冶の道場たるに相隔る甚だ遠いやうである。かゝる批難は今や瀕々として、吾人の耳朵を衝くが、これ言ふ者の是か、言はるゝ者の非か。

余は茲に深く感ずる處あつて、特に成長期に於ける子女の教育に一箇の考を持ち、先づ、幼稚園より高等學校に至る學園の設立を志し、目下千葉縣下に於て、八日市場敬愛高等女學校文部大臣認可、關東中學校同上、旭敬愛公民中學、並に自由幼稚園を起し、潛越自ら揣らざる嫌あれど、これが主宰者として管掌してゐる。蓋し、眞の教育は須らく高遠の理想と確乎不拔の信念の所産であらねばならぬ。余がこれ等の學校に於いて施さんとする所は、余が高等學校時代に目覺めたる人格の修養、大學時代に捉へたる人生觀、而して社會の實戰場裡に於いて親しく味ひたる體驗より發したる信念、理想にして、本書は實に其の一端を敘述したるに過ぎぬ。

本書の説く所は、即ち余が管掌する學校の主張綱領にして、そが生命とする所のもの、在來の修身訓育とは聊か其の面目を異にし、端的に青年子女の魂に飛び入り、心のドン底を判り、以つて子女の覺醒、自覺を促さん

ごするものである。魂のドン底より湧き出したる深刻なる自覺あらば、即ち修身教科書の教ふる所を實踐することに於いて、多大の感興と意氣を發揮し得るに相違ない。實に本書の目的は人心奥底の琴線に觸れ、修養の根本を衝きて、これが實現實行の活力を獲得せしめんごするにある。只、駑馬に鞭ちて千里の遠きに走らんとするの嘆はあるが、誓つてこれが貫徹を計らんとするばかりである。而して、本書に盡きざる所は、他日第二卷以下順次刊行して、以て體系を建てたいと思ふ。

余は法の運用に參與する事の意味深大なるを感じ、在野法曹として法律事務に従事する者、教育に對しては元より門外漢である。唯、意餘りて筆これに及ばざるの憾あり、叙述若し過誤あらば、先覺の士幸に高教を垂れ給はんことを。

大正十五年十二月

著 者 識

## 緒 言

一 本書は著者の管掌する八日市場敬愛高等女學校、關東中學校、旭敬愛公民中學、其の他青年團處女會等に於て、著者が試みたる講話を蒐録せるもので、著者の理想、信念、希望並に青年子女修養の根本義を記述せるものである。

一 本書は著者が管掌する前記男女中等學校の根本精神として、修身科教授に修身教科書と併用せしむるものであるが、又、一般青年男女學生、青年團員及び處女會員等の修養讀本として讀んで頂きたいのである。

一 本書は著者の思想、信念の體系の一部を成すもので、排列雜然として居るが、他日、更に第二卷、第三卷を續刊し、全體系を整へる計畫である。

一 本書の編述に就ては齋藤友治郎氏、刊行に就ては加藤至徳氏の厚意を深く謝するものである。

著 者

# 敬愛讀本

## 目次

一	校 是	………	一
二	敬愛の解	………	一二
三	精神修養の第一原理	………	二〇
四	内心の聲	………	二七
五	人生に失敗ありや	………	三三
六	信念の力	………	四〇
七	人生の最大發見	………	四五
八	公人の態度	………	五三

九 公民教育の一面 …………… 六七

一〇 普通選挙と建國の精神 (上) …………… 七六

一一 普通選挙と建國の精神 (下) …………… 八三

一二 我が建國の理想 忠君愛國の本義 …………… 九〇

一三 青年子女交際の途 …………… 一〇三

一四 感 激 …………… 一一一

一五 白隠和尚と使徒パウロ (上) …………… 一二九

一六 白隠和尚と使徒パウロ (下) …………… 一二九

一 校 是

大正十二年九月一日の午後三時半頃、あの大震災大火災の眞最中である。東京衛戍司令部から殷々たる五發の砲聲が轟きわたつた。これは、國家非常の場合にのみ發せられる號砲である。この號砲を合圖に、苟も現役軍人たるものは、何人ごいへごも急ぎその所屬隊に駆けつけねばならぬ定めになつてゐるのである。

折柄、麻布三聯隊は、前日富士の裾野の演習から歸營したばかりで、丁度、九月一日は慰勞休暇のために、營内は殆んどがら空きになつてゐた。が、市内にゐた兵隊は、この號砲を耳にするや、ここ

關東大震  
災と麻布  
三聯隊



ごごく營庭目ざして駆けつけたのであつた。中にも、河村二等卒はこの時淺草の自宅附近で、一生懸命に火の手を防いでゐたが、合圖の砲撃に萬事をなげうつて兵營指して駆けつけた。伊藤一等卒は、既に火の手が我が家に延びて、家族も危険に瀕してゐたが、これを振りすて、來た。家族はその後何うしたか。少しの消息もないのは勿論焼死してしまつた爲めであらう。悲壯なのは米本伍長勤務であつた。彼はこの時本所で號砲を耳にした。が、行手は一面の火の海である。煙にまかれ、猛火の底を潜り、身に大火傷を負ひながらも辛うじて營門まで辿りついたが、そこでバツタリ倒れてしまつた。松尾一等卒は、老いたる母、幼ない弟等をいたはりつゝ、あの本所被服廠跡まで避難して來た時、砲聲を聞いた。すは一大事、かうしてはゐられないと、家族を被服廠跡に残して歸營したが、そのまゝ

一家は盡く焼け死んでしまつたのである。

延いて同月十九日午後三時、桑田侍從武官は 陛下の思召によつて同聯隊を訪問し、これ等勇敢な人々を營庭に整列せしめ、親しくその物語を聽き、感激措く能はず一切の顛末を 陛下まで奏上したといふことである。(新聞記事の大要)

又、今から百年許り前江戸に彫刻の名人で則行といふ人があつたその子の鶴吉といふは不肖の子で至つて無器用、とても父の跡を繼ぐ伎倆はなかつた。自分も到底彫刻は見込がないと斷念し、他に適當な商賣もど、いろいろの職業に手を出しては見たが、一つとして成功するものもなく、失敗を重ねて、遂には誰一人面倒を見て呉れるものもなくなつてしまつた。父が存生中恩顧にあづかつた者さへも振り向きもせぬやうになつてしまつた。鶴吉はつくづくこ

彫刻師の  
一心

自分の鈍才、不運をはかなみ、この上は死んで父親の名を汚したことを詫びようと覺悟した。それぞ知つて、鶴吉の母は泣いて我が兒を諫め、鶴吉も氣を取り直して、今生の思出に、形見に遺す観音像の製作にこりかゝつた。彼は一室に閉ち籠り、寢食を忘れ、渾身の精力を振つて刻みはじめた。母は母として、仕事場の隣室に端座し、一心不亂に観音經を誦して、我が兒の製作を勵ました。かくて二十五日、彼が一心籠めた観音像は刻み上つた。洵に是れ非凡の傑作、父則行も及び難いものであつた。これを見た母の喜びは一方でない早速に父の靈前に観音像を供へ、お前には是れ程の力量があつたのである。今まで外に現はれずに潜んでゐたのである。今こそ自分の力量がほんとうに判つたのだ、最早死ぬに及ばぬ父の跡目を繼ぐべきであるぞ、母子相擁して嬉し泣きに泣いたといふ。(某將軍演説の一節)

教育の根  
本精神

この兵士達の精神と、この鶴吉の赤心は、眞に懦夫をして奮起せしめるものがあるが、しかし、この精神は實は世の何人にもあるのである。唯、その事に感付かぬ、思ひ及ばぬ、こいふまでのこととこれを見出し、これを引き出せば、何人にも斯くの如き精神は顯現するものに相違ないのである。結局、教育といふものは、この精神を引き出し、發揮せしむるに外ならぬのである。若し、青年子女に本來かくの如き精神が無いものとするならば、無は飽くまでも無であるから、如何に外部から注入しても、糊塗しても、それは付焼き刃に過ぎぬ。直ぐに剝れてしまふであらう。だが、本來有してゐるものであるが故に、これを顯現せしめ、政治方面に向はせるならば眞の政治家となり、教育方面に赴かしむれば眞の教育家たるべく、實業方面に従事せしむれば眞の實業家となる。その他萬事皆然りて

松蔭先生  
の教育法

ある。故に、この點に於て遺憾なく、教育の力によつて各々の力を發揮せしめ得んか、日本の改良、否、全人類の改善も亦期して待つべしといふも敢て過言ではない。

僅か六疊に四疊半二間に過ぎぬ松下私塾、而かも松蔭先生が鵬翼萬里渡米を企て、米艦に投ぜんとして幕府に捕はれ、獄舎に繋がれ一時出獄して再び囚はれの身となる迄、その間僅か二年半の教育ではあつたが、明治維新改革の大人物は此の塾より輩出した。そは實に松蔭先生が此の種の教育の賜に外ならぬ。「松下は陋村なりと雖も、誓つて神國の幹とならん。」と、常に先生が傲語せられたのも、全く此の教育法に深大なる自信があつたからである。

又、北米合衆國大統領リンカーンのあの聖なる心は、彼が十歳の折他界した彼の母親の教育が然らしめたといふ。赤貧洗ふが如き裡

リンカー  
ンの眞心

内部に潜  
在する神  
性靈格

にあつて、彼の母親は常にリンカーンの頭を撫でながら、天の使のやうな眞心こめて言ひ聞かせた。「人の尊い處は、地位でもない、財産でもない、學問でもない、唯、誠心こそ人の尊むべきものである。」と、この教へは、少年の心に牢乎として植ゑ付けられた。成育の後、あのやうな聖なる人格の所有者となつたのは、この母の教育が作りあげたのである。即ち、リンカーンの母人は、少年リンカーンに潜在してゐる眞心を遺憾なく引き出したのである。

國家の偉大は領土の廣大にあらず、富の豊富にあらず、軍隊の強大にあらず、唯、正義の士の存するによると、西哲の言葉のごとく誠に、學校の眞個生命は、校舎の大なるにあらず、設備の完全にあらず、生徒教師の多きにあらず、亦必ずしも學問の成績好良なるのみにもあらず、上級學校への入學率の多きにもあらず、生徒各々が

自ら自己の内部に潜在する神性靈格を自覺せしめ、之れを引き出し之れを助成し、之れを實現せしむることにある。これが教育の根本である。萬一此の點に缺陷あらんか、校舍如何に輪奐の美を極め、設備如何に整頓するも、そは單に木材と石材と瓦の組合せに過ぎぬであらう。

自己内部に潜在する偉大なる靈性を自覺すると同時に、吾人は日本人たることの特殊の自覺を要する。日本には日本の理想あり、大精神あり、日本として果すべき使命天職がある。單に國富み、兵強く、領土擴大し、人口増殖すとも、一個不拔の理想使命なくんば、唯、圖體の巨大なる塊に過ぎぬのである。(日本の理想使命については後に説述す)

既に自己内在の靈格を悟り、同時に日本固有の理想使命を覺悟したる上は、之れを基礎とし、その上に活躍すべき各自の活動力を、

グラント  
將軍の  
生涯

最も有効に發揮せしむるの方法を考へねばならぬ。若し夫れ之を誤り適材を適處に向はしむることなく、短所缺點とする方面に向はしめんか、内在する偉大なる力は遂に發揮する能はず、人生の悲慘、國家社會の不幸、是れより大なるはなからう。

この點についてグラント將軍の一生涯は善き手本である。人生四十不惑の域に達するまで、郷黨以外に殆んど知られなかつたグラント將軍が、如何なれば南北戦争に一躍北軍の総帥となり南北戦争を平定し得たのであるか。彼が兵學校卒業の成績は中以下であり、加ふるに病弱にして軍人として極めて不適任、軍籍十五年にして退職し、轉じて官吏となつたが、これ亦不成績にて退官し、爾來、或は農業に或は商業に或は工場に、轉々として其の職を替へたが、孰れも失敗に歸し、遂に貸金取立業まで試むるに至つたが、又々失敗し

失望落膽將に人生の落伍者に終らんとする時、アメリカ開闢以來の國難に際し、初めて隠れたる雄才大略を發揮し、一躍して世界的雄將となり、死して靈廟に祀られ、世界の隅々より蜩集する參詣人の禮拜の標的となるに至つた。如何なる雄略偉材も其の處を得ることならざることは、實に斯くの如くである。

今日、獨逸に於ては、學生の適材適所に着眼し、社會に出で、其の活動方面を誤らざらしめんと指導しつゝある教育者ありと聞く。斯くてこそ教育の効果を最も有効ならしめ得るのである。翻つて、我が國中等教育を視るに、未だ劃一的の詰込主義の夢さめず、競馬場に於ける競馬の如く、唯夫れ試験點數の多寡を争はしめて、何等大處高處より生徒を指導するもの殆んど之れ無きが如し。是れ聽て亡國の教育に終らずして何ぞ、遺憾極まりなき現狀である。

## 獨逸の教育法

## 我が校の眞精神

以上を要約するに、先づ人として自己内在の神性靈格を自覺し、同時に日本人として日本の理想使命につき確乎たる信念を抱き、次に自己の力を最も有効に最も完全に活躍せしめ、以て人生の眞の勝利者たらしむる様指導誘掖することこそ、青年期に於ける教育の最も肝要なる点である。青年子女各自の胸底深く潜在するかの鶴吉の赤心、かの麻布三聯隊の兵士たちの眞心、これを日々夜々成長發達せしめ、聽て亭々天を摩する大樹たらしめたい。我が校に於ては先生も生徒も互に勵みいそしみ、この點に向つて努力邁進したいと思ふのである。

## 二 敬愛の解

西郷南洲  
人の敬天愛

私の敬慕し崇拝する偉人は、日本にあつては西郷隆盛、外國にあつてはアブラハム、リンカーンである。英雄豪傑であるとか、百戦百勝の將であるとか、宏業偉績を爲し遂げたといふ方面から視るならば、此の兩偉人に勝る英傑は他にも少くないであらう。然し、神性靈格人類の最高位に達し、群丘中の秀峰、旭光燦爛として輝ける点、此の二偉人に優るものはなからう。余は聊か兩偉人の偉大なる根本について研究を積み、益々敬慕崇拝の念已み難きものあるに至つた。今南洲翁について一二を述べんに、翁の遺訓の中に、

一、道は天地自然のもの、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふ故、我を愛する心を以て人を愛するなり。

天の體得

一、道は天地自然のものなれば、講學の道は敬天愛人を目的とす。とある。勝海舟は「余が西郷に及ばぬ處は、大眼識と大至誠にあり」と云はれたが、その大人格の源泉、それは元より天稟の然らしむるものではあるが、又「天」の體得「天」に對する不拔の信念が其の根底を爲してゐるものであらう。而かも「天は人も我も同一に愛し給ふが故に我を愛する心を以て人を愛するなり」この妙諦に至つては、人道の最高權威者キリスト、釋迦の域に達したかと思はるゝほどである。

近時仁義道德の聲徒らに大にして世は反つて荒み果て、法律制度

備つて違反者簇出し、修身修養の講義は八釜しくして不良生徒増加する等、其の原因は多々あらんも、日本人に「天」に對する信念體験なきこと、それが根本の禍根を爲してゐる。善ならむとして善たり得ず。正ならむとして正たり得ず。却つて我の欲せざる不正不義は縦横に我を擒にし、我が爲す所は我が心に悖る。沈思一番、深く我が内心を反省する時、誰れかこの嘆聲を發せざる者あるか、是れ人類共通の嘆きである。

「天」に對する信念は道德の原動力、教育の歸着点、思想善導の基準である。百万遍の仁義道德論も、一念茲に缺如せば、根なき生花に過ぎず。一時の華麗も忽ち凋み、却つて醜を増すのみである。現時、日本の凡百の腐敗、思想の動搖、民心の不安皆な茲に起因すると思ふ。

## 天の人格

西郷隆盛は「天」を普通一般に謂ふ如く漫然崇敬せず、一の人格者と見て「天は人も我も同一に愛し給ふ故我を愛する心を以て人を愛するなり」と喝破せられた。哲學宗教の終局の歸着點は神に在り、といふが、其の神が人格者にして、人も我も同一に愛し給ふ故に、我を愛する心を以て人を愛するなりとの體得信念に達しなければ、神を敬するなごといふことも畢竟空念佛に過ぎまいと思ふ。

兒玉大將が奉天の合戦に於て、自己の責任の重大を感じ、毎朝人知れず太陽を拜したといふ、平素此の方面に無頓着な大將も、思はず西郷の敬天に達したと思ふ。迷信の嫌はあるが、却つて大將の心事の偉大さが偲ばれる。自分が高等學校在學中、學生がボートで冒險的に外洋に出で、風浪の爲めに遂に顛覆したことがある。その折遭難者の或る者は何神に祈り、或る者は何佛を唱へ、皆郷里の神佛

世界三聖  
の大精神

に祈願したといふ。迷信として笑ふ勿れ、たゞへ迷信であつても魂は根底に觸れたのである。

「天」を呼び「天」を求め、魂を「天」に躍らし、天人合體の妙所極地に驀進することが出来るならば、人生の疑問は立ち所に解決し百の說法、千の教訓直ちに實現し得るに相違ない。この天人合體の高峰より降り、「天は人も我も同一に愛し給ふ故、我を愛する心を以て人を愛するなり」と唱へ、之れを實現實行せんとするに至りては止に是れ救世主の域に達してゐると思ふ。キリストが四十日間荒野に於て寢食を斷ち、悪戰健闘、サタンを征服し、再び巷里に現はれ「天國は近けり悔る改めよ」と叫んだのも、釋迦が菩提樹下に端座、幾年の難行苦行の體驗により、豁然として「一切衆生悉有佛性」と喝破し、衆生濟度に打ち出でたるも、孔子が宋國の太夫桓魋が已

天の信念  
を教育の  
第一原理

れを害せんごした時「天徳を予に生ず桓魋其れ予を如何せん」といつて平氣で居つたのも、皆同一境涯だと思ふ。教育、哲學、宗教の歸着點、人生の到達點皆茲に集中すると思ふ。

此の點を確と擱んでかゝらなければ、個人としてはぐらつき、社會ごしても動搖止まないのは當然のこゝだ。識者のいかに叫ぶも聖哲のいかに憂ふるも、學校教育いかに盛んなるも何ごも仕様がなご思ふ。やがて「天」に到達するの中途の坂途と思へば、敢て恐るゝに足らぬが、日暮れて餘りに途遠く、已れ一代を全くの落伍者ごなす如きこゝあらば取り返しのかぬこゝだ。

余は西郷に従ひ「天」の信念を教育の第一原理とするものである是れ愛の根本解釋である。「天」は我も人も同一に愛し給ふから、我を愛する心を以て人を愛するなりといふに至りては、「愛」の源



泉渾々として、汲めども汲めども盡きぬのである。校名に「敬愛」を附したのは、此の理由からである。即ち我校の理想目標を敬愛で現したのである。

## 愛師弟の敬

余が諸先生方と常に語り合ふ愛は、この幾百の女生徒、この幾百の男生徒、これ皆偉大なる魂の持主である。萬物の靈長たる或物の持主である。吾人は此點を衷心から敬せねばならぬ、愛さねばならぬといふことである。この一點に缺くる處あらんか、我校は全然失敗である。若し此の點に於いて遺憾ならんか、たごへ校舎は貧弱でも、設備に遺憾あるも、大勝利大成功である。我校は生徒の人格生徒の魂を敬愛する點に於て、天下第一等たらんことを希望し、主張し、期待してゐる。生徒を教子として聖愛する、世に此れほご尊い天職が又ごあらうか。しかも此の聖愛心たるや「天」の信念より

渾々として流れ出で、汲めども汲めども盡きないならば、これに感激しない教子はあらうか。先生方の敬愛に感激した生徒は、聽て生徒間に敬愛の念湧き出で、茲に校風春風の如く漂ひ、言はず語らずの裡に生徒の品性人格はすく／＼と天に向つて成長發育するに相違ない。只遺憾に堪へないことは吾人が天人に對する信念體得の未だ足らぬことである。吾人が日夕の祈願は唯ここにあるのみである。

### 三 精神修養の第一原理

近時、學生青年に對する精神修養の聲頗る盛んにして、品性を高めよ、志操を堅固にせよ、誘惑に打ち勝て、努力奮闘せよ、質實剛健、華を去り實に就けよ、曰く何、曰く何と、その修養の題目、殆んど舉げて數ふるに違なき有様であるが、然らば、その實績は如何といふに、卑近なる例であるが、男子中等學校の試験に於て、所謂カンニングの弊風頗る盛んとなり、ある校の如きは此れを公然の秘密と心得、生徒一般に此れを罪惡視せぬといふ。又ある校に於ては、試験の際教師が教室の前後に立ち、生徒の監視に眼を廻し甚だ

カンニングの弊風

怖るべき將來の禍根

しきに至つては、節穴、窓の隙間等より、窃かに生徒の行動を視へるものありといふ。嗚呼、自己の愛する教子を斯くまで邪視する教師の不心得、不見識、又目的の爲め手段を擇ばず只試験の点数の多からんことを欲し、詐欺窃盜を眞似る生徒の卑劣墮落、茲に至つて極まれりといふべきである。今や世上一般、危険思想の流行を畏怖する者は多いが、此の純無垢なる學生の所謂カンニングの弊は、危険思想以上に怖るべき將來の禍根たるに、氣付けるものの少ないのは、實に痛恨に堪へない次第である。未だ社會の風波に翻弄されず、利害得喪に超然たる、純なる學生が、斯かる破廉恥行爲を敢てして恬然羞ぢず、却つて其の巧妙を誇るものあるに至つては、將來彼等が社會に送り出されたる後の醜態こそ、眞に思ひやらるゝのである。

若しも、斯かる學生が將來社會に出て、政治家ならんか、即ち、投票を買収し、利權を漁り、砂利を食ひ、瓦斯を呑む。實業家たらんか、即ち私腹を肥さんがために、株主を犠牲にして省みざるに至らん。近時 會社銀行の倒産頻々たる、又、官界の綱紀紊亂せる、いづれも斯かる徒輩の跋扈せるがためである。

この怖るべきカンニングの弊風を、如何にして一掃すべきか。或る學校にては、之れを嚴罰に處して却つて生徒を悪化せしめたといふ。源泉清からずして流れの清まる筈はない。根本問題として先づ第一に生徒の品性人格の向上發達に待たねばならぬ。即ち修身科の尊き教示に待たねばならぬ。然るに何ぞ、生徒の多くは肝腎な修身科を嫌忌し、甚しきは輕蔑するものすらありといふ。苟くも一校の校長が受け持つ重要な修身科が、斯くの如く生徒に輕んぜらるゝ

權威なき  
修身科

に至つては、品性を高め人格を陶冶する如き、到底思ひ及ぶべからざることである。蓋し、修身科が斯くの如く權威なきものとなれるは、修身科そのものが權威を失へるには非ずして、之れを生徒に施す上に過誤あるがためである。御座なりの修養談、皮相なる修身講義、在り來りの訓話訓戒、そこに何等の生命なく、光輝なきに於ては、遂に生徒等の内心の琴線に觸るゝことが出来ぬ。生徒は、もつと深くもつと高い、根本的な或る物を要求してゐる。即ち、人ごは何ぞや、この第一原理に向つて、何物をか求めんとしてゐる。人の問題、人格の本質の問題、是れ彼等が知らんと欲する根本の問題であつて、茲に觸れざる修身講義は生命なき講義である。彼等が修身科を輕んずるの傾向は、こゝより生ずるのである。

人には本來靈妙不可思議なる神性靈覺の内在するありて、恰も、

神性靈覺

籠の小鳥が自由なる大空の生活を慕ふが如く、幼児が慈母の乳を慕ふが如く、無限の實在に向つて常に憧れてゐるのである。これ、深く深く自己を内省する時、何人も體驗する嚴然たる事實である。釋迦が「奇なる哉、奇なる哉、一切衆生に佛性あり」と叫んだのも、キリストが「汝等は神の子なり」と説かれたのも、乃至、孔子が「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と述べられたのも、齊しく此處を説かれたのに外ならない。ソクラテスが死刑の當日、靈魂の不死を力説しつゝ、從容として毒杯を仰ぎたるも、アメリカの大統領ガーフィールドが、たごへ、自己の屬する黨員全部が、自分に反對するとも、自分の良心の命に反對することは出來ぬと絶叫したのも、又、彼の西郷南洲が、人を相手にせず天を相手にせよ、天を相手にして己を盡し人を咎めず、我に誠の足らぬを尋ねべし、といは

修養修身  
の第一原理

れたのも此の妙境を喝破したのである。此處が人格品性の出發點、修養修身の根元である。

現代の中等教育、殊に修身科において、此の點を高唱力説するもの多くあらうか、勿論活眼達識の教師は既に早く此處に着眼し、生徒の魂の中核に向つて、其の神性靈格を目覺さんと努力勉勵しつゝ、あらんも、現在の教育制度上、教材の案排上、其の實現は至難なるがため、多くは在り來りの、通り一遍の修身訓話を聞かするに止まるが故に、生徒も耳を傾けざるに至る。彼の所謂カンニングの弊習の因つて來る根本の原因は、茲に由來するではあるまいか。

修養、修身の根本は、生徒が自己の魂に對する自覺、内在の神性靈覺に對する自信にある。此の點を閑却しては、百の説法も、千の修身談も、血氣旺盛なる青年に何等の感激を與ふる能はず、内心の

琴線を高鳴りせしむる能はず。宜しく其の根本を生徒の胸底深く徹底せしめよ、品性の改造、人格の向上、期して待つべしである。彼の所謂カンニングの如き陋習は、忽ち雲散霧消するであらう。

#### 四 内心の聲

命 天來の使

若し、眞劍に我れ起たずんばあるべからず、我れ爲さずんばあるべからずと感ずる時、しかも其が心の奥底より深く強く、且つ大膽に、我れに應ふる響ある時、人は敢然として、其の目的とする處に邁進すべきである。假令、其の事が如何にも宏大、如何にも難澁、到底我が力に及ばずと思はるゝ事も、この天來の響に應じては、驀然として努力奮勵すべきである。たとへ自分一代にして完成する能はずとも、必ずや代るべき繼承者の出で、之れを完成するであらう。是れ天來の使命なるが故である。

人には人智を以ては到底了解し能はざる、一種不可思議なる力がある。血の汗を流し、渾身の力を絞り、努力するも猶且つ及ばず、進退谷りて絶望の淵に沈まんとする時、忽焉として光明現はれ、天來の何物か來つて我れを扶け、我れを導き、我れに力を與へ、其處に一脈の活路開かれて、我れながら不可思議を感じるころがある。

## 聖德太子

傳へ聞く。聖德太子が日本開闢以來の大改革に着手せられし時、如何とも策の施すべきなき大難事に遭遇せられし事屢々なりしが、太子は其度に法隆寺の一堂の祕佛の前に端坐して禪定に入り給ひ、其の義理を考へられたといふ。其の時、東方より金人現はれて、其の意味を解示されたといふ。這は架空のことではあるまい。聊かの潤飾はあらうが、眞實に相違ない。精進工夫其の功を積み、精神愈々高調し、内省愈々深く、邪念邪思は去り、私利私欲は放れ、六根

潔まり、渾然として天地と融合し、神人歸一するの境地に到れば、誰れしも自己内心に靈妙なる囁きの聲を聞くを得る。是れ今日の科學乃至皮相なる人智を以てしては、到底達し難き眞智眞慧にして、是れぞ天來の聲である。此の聲の命令、これぞ聖德太子を導きたる金人そのものである。

## 人生の不幸

凡そ人生の一大不幸は、此の内心の聲を聞くを得ず、一生涯を碌々として、墓穴の彼方に葬り去らるゝことである。自己の天職、自己の使命とする處に何等の考慮も拂はず、徒らに飲んで食うて、着て被りて、僅の物質を蓄積して、家屋敷を立派にすれば、即ち我が事成れりとなし、一生を夢の如くに送る程、はかなくも哀れなるはなからう。假令、位は人臣を極め、富は山を爲すも、内心に響く天來の聲を聞くを得ざれば、これ人生の根本的失敗である。

## 至上命令

内心の聲は最上權威者の聲である。至上命令である。最高最良の正義である。勇氣の源泉である。歡喜の源泉である。奮闘の源泉である。成功の源泉である。滾々として汲めども盡きざる生命の源泉である。古來、偉人と云ひ、聖人と云ひ、或は節婦と云ひ、賢女と云ひ、凡そ人の師表と仰がるゝ人々は、皆、此の内心の聲を、正直に、卒直に、有りのままに聞いた人に外ならぬ。この内心の聲に悖らんか、たゞへ外形の如何に宏大にして派手やかなる事業も、畢竟、砂上の樓閣に過ぎず、決して永遠性を有たぬ。何等世道人心に裨益する處なくして、結局は、無きに等しきものである。

人の器には大小の差あり、強弱の相違ありて、天分は如何とも致し難いが、只、内心の聲に應じ、夫れくその器に應じて働けば善いのである。實は器の大小強弱も、初めより分つて居るものでない。

内心の聲を聞くに及んで初めて分明するのである。故に、自己の才能力量等は、決して第一の問題ではない。先づ以て自己内心の聲を聞き、天來の使命を覺るべきである。然らば、他は自づから分明するものである。大聖釋迦が早晨又は薄暮に、必ず靜寂なる森林の精舍、洞穴等を選びて、深く深く座禪に耽つたのも、論語に日に三度吾れを省るごあるも、多忙を極めながら、ルーテルが毎朝二時間つゝ神に祈つたのも、又、西郷南洲が常に天を唱へたのも、いづれも内心の聲を聞かんごしたものに外ならぬのである。

余は、殊に年若き學生子女に對し、根本的の修養方法として勧めたいことは、諸子が毎日早朝乃至寢前に、三十分乃至一時間、靜思默禱すること、釋迦、ルーテルの如くし、深く深く我が内心に食ひ入ることである。忙しい時も之を廢せず、閑な時も之を怠らず、喜

根本的の  
修養方法

びの時も、悲しみの時も、必ず之れを行ひ、毎日、毎月、續け行ひて年を重ね、精進工夫せば、遂に確乎たる内心の聲を聞くに至る。一度、この體驗、この境地を味ひなば、道德の實行は必ずしも至難でなからうと思ふ。所謂學校の修身(教科書)も修養談も、古人の謂へる五倫五常の訓戒も、自然と實踐躬行し得るに至るものである。

近時、中等學校に於て、生徒が修身科の授業を嫌忌し、甚しきは之れを輕蔑するが如きことあるは、此の根本に觸れないからである。若し先生自身が此の根本に觸れ、内心の聲を體驗し、眞劍に生徒の魂を擲むならば、修身科ほど生徒を引き付け、感激せしむるものはない。余は確信す、余は斷言す、日本の前途は中學學校生徒の修身科に對する興味感激の程度如何により卜知するに足ること。

日本の前途

## 五 人生に失敗ありや

ナポレオンの意氣

人生の尊きは意氣である……彼の佛帝ナポレオンが天を衝かんとするの意氣をもて、忽ちにしてアルプス越えとなり、獨を蹂躪し露に遠征するの時、至る所、眞に天馬の空を駈けるが如き慨があつた。然るに、一敗地に塗れてセントヘレナの孤島に流さるゝや、意氣全く阻喪して、復た昔日の倣なく、全く別人の觀を呈した。げに人の一度意氣阻喪せる、才能あるも働かず、學識あるも活きず、人格高きもその光りを發せず、鹽の鹹味を失へる如く、人としての價値を失ひ、生き甲斐なきものとなり終ること、セントヘレナ流後の

五 人生に失敗ありや



成功者の  
共通點

ナポレオンに見ても、明らかである。

自らを卑しめ、自らを輕んじ、「もう自分は到底駄目だ。自分には及ばない。」と青息をつく者に、其の目指す目的の成就した例はあるまい。大なり小なり、一事を成し遂げた人の心底には、「我れは必ず爲し得ん、必ず爲さざるべからず」との確信と意氣が漲つて居る。天稟の厚薄、器量の大小、其の他環境遺傳等によつて、働きの上に大小の差こそあれ、成功者の共通點は、必ず意氣の阻喪せざる一事である。失望落膽、天を恨み地を呪ひ人を尤むる時、其の者の美點長所は悉く影をひそめ、方に失敗の淵に沈淪した時である。意氣天を衝き、我れ爲さざるべからず、必ず爲し得んと確信し、目的に向つて突進する時、其の者の短所缺點は皆蔽はれて、却つて嘗て氣付かざりし所の才能膽略等湧くが如くに發動する。事の成ること

成らざると、人格の向上すると、然らざると、果ては悲しみも喜びも、一にかゝつて其の人の意氣の盛大なりや否やの反映に過ぎずと見るこゝが出来よう。

天は人に  
堪へ得ぬ  
重荷を負  
はせず

世上、事業に學問の研究に、家庭の問題に、其他凡百の問題に自分は到底駄目であると、早くも意氣阻喪するものがあるが、これ何たるこゝぞ。抑も、意氣の阻喪とか失望とかいふこゝは、人間本來の附き物であるか。言ひ換ふれば、天が人間を作るに當り、人間の構成分子として附與したるものか、人間社會に於て免れ難き運命であるか。予は信ず！天は人間に萬物の靈長たる精神を附與するに當り、意氣阻喪するが如く作りなしたるものに非ずと。人間が渾身の力を出して目的に突進する時、天は必ず其の人のために成功を祈つてゐるに違ひない。天は人に堪へ得ぬ重荷を負はす筈がない。成就し得

ぬ事業を夢想せしめない。即ち、人間は意氣阻喪せざる様、失望せざる様、失敗せざる様に作られてゐるものである。

古歌二首

うきことこのなほこの上に積れかし

限りある身の力ためさん

の古歌は、よく此の邊の消息を語つてゐる。如何に憂きことの積り重つて來ても、旺盛なる氣魄と意力の前には必ず屈伏せらるゝに相違ない。

爲せは成る爲さねは成らぬ成るものを

成らぬごいふは爲さぬなりけり

出來ぬのではない、敢然として爲さぬからである。失敗するのではなく、成功に努めないのである。本來、成就すべきもので、それが當然なのである。失敗するごいふことは脱線なのである。意氣は盛

んなるが常態であつて、失望や落膽は例外である。

柳は緑、花は紅、是れ自然である。意氣盛んにして、爲す事の必ず成就する、是れ人間の自然である。柳を紅に、花を緑ならしむるは不自然である。意氣阻喪の結果、人生を失敗に終らしめることがこれ不自然である。

生活難と  
意氣

富に於いても然りである。普通に富むのが當り前であつて、巨萬の富を積むと、赤貧に陥るのが例外である。近時、生活難の聲は頗る喧しい。(歐洲大戦争前には斯くの如く深刻なる生活難の聲は餘り聞かなかつた。)人間の呻きごとして、之れほど悲惨なるはない。然し天は人間を地上に成育せしむるために、當然の事として生活の安定を與へてゐる。當然人に附くべき筈の普通の富は、天が之れを與へてゐる。之れを捨て、求めざるが故に。生活の困難を來すので

ある。本来、人間は當然生活し得べく與へられてあるが故に、その生活に困難のあるべき筈はない。彼の學校卒業者が就職難を叫ぶ如きも、亦同様に、不合理極まる絶叫といはねばならぬ。

本来、人生に失望なるものなし。

本来、人間の意氣は阻喪すべきものにあらず。

本来、人間は當然に生活し得べきものである。

大確信  
働けば生活が出来、爲せば成就する。是れそ人生の常道、天の大道である。深夜、人静まりて萬籟寂として聲なき時、徐ろに我れが胸に手をあて、深く心の底の底に思ひを潜めよ、啣々として我れに囁く聲を聞くであらう。我れは生けるなり、我れ爲さざるべからず。そこに磐石の如く小搖ぎだにせざる大確信の生じて、失望もなく落膽もなく、熾烈なる意氣は心内より湧然として起り來るを

活殺自在の妙域

覺ゆるであらう。

此の境地に至らば、人生觀は一大飛躍を爲し、世人の以て意氣阻喪する處、我れには精神鍛鍊の妙藥となり、失望落膽する處、我れには勇猛心を奮ひ起すの機縁となり、失敗する處成功の第一歩となり、泣き悲しむ處歡喜の礎石となり、寒時寒殺し熱時熱殺す。貧富、苦樂、萬物我れに於て皆宜しく、斯くて失望失敗に超越し、活殺自在の妙域に達し得ることが出来るのである。

## 六 信念の力

偉大なる  
潜在力

永い年月病床に呻吟し、醫藥に親しんでゐた老婆が、火事ツ！といふ叫び聲、亂打する警鐘に、我破と跳ね起き、大力の男が二三人かゝつても動かぬ様な、長持ち箆筒を運び出したといふ例は、屢々耳にするところである。平常は、臆病者よと嘲けられてゐた兵士が、實戦に臨んで、彈丸飛雨と飛び交ふ中に突進し、拔群の勳功を樹てたといふ話もある。弱き者よ汝は女なりといふが、我が兒を護るために、猛虎を追ひ却けた母もある。かくの如く、人は非常の場合に臨む時に、非常の力を露すことがある。この力は、唯、非常の際に

のみ生れ出づるにはあらずして、實に平常、各自の内部に潜在してゐるものである。然るに、人は此の力に心つかず、漫然打ち過すものが多い。此の力を發見し、自己の力を適確に裁量判定することは何物にも換へ難き人生の大發見大發明である。

深く／＼大地を掘る時。そこより無限の泉水噴出し、深きは深きに隨ひ、水いよ／＼清く、噴出ます／＼多い。かくの如く、人は自己内心に向つて、深く／＼省察し、思は高く想は深く、靈感靈氣の我れを襲ひ來るの時、内心に一個巖然たる實在に衝き當り茲に自己の使命を自覺し、如何なる難關をも突破せんとする信念の湧出するを得るのである。此の信念の向ふ處、眞に萬夫不當の力を發揮し得るのである。

コロンブスが小舟に帆を揚げ、大陸發見に出航した時、世の學者

コロンブ  
スの信念

智者は皆な彼を嘲笑して狂人となした。然し、彼れコロンブスは地球の圓形たるを確信し、西方に必ず陸地あることを信じて疑はず、斷乎たる決心を以て出航したのであつた、茫々たる大洋、際涯なき大空、時に暴風襲ひ來り、時に怒濤捲き起り、行けども行けども、絶へて陸地の影すら認むるを得ず、水夫等は失望の極、自暴自棄となり、コロンブスを殺して歸航せんと企てるものすら出づるに至つた。然しながら、コロンブスの信念は山の如く動かず、如何なる困難、如何なる迫害にも驚かず、不動の決心を以て益々西へ西へと航した。「西方に航す、是れ吾人の進路なり。」と、彼の航海日誌に認められてあつた。彼の成功は即ち彼の大信念の力であつた。

## 信念の力

自己に對する信念、自己の使命に對する確信、是れぞ人生の基調である。是れぞ人格の根本である。此の信念ある處、活動となり、

向上となり、奮闘となり、成功となる。此の信念の無き所、只失望と失敗とあるのみ。洵に人の價値は、信念の厚薄によつて相違を生じ、人物の大小は信念の大小の反映である。大人物とは畢竟大信念の別名である。

四圍の形勢漸く險惡となり、萬事意の如くならず、果ては我が味方すら我れに背くの時、最後の勝利を期して、勇猛心を奮ひ起し、目的に向つて突進し得るは、一個信念の力の存するに據る。世人の失望する時、希望に満ち、嘆き悲しむ時、歡喜に溢れ、貧なるも心は富み、敗るゝも氣は挫けず、嘲けらるゝ却つて其の者を祝し、惡罵は自己反省の機に轉じ、萬物皆我れに於て宜しこの聖境を拓き得るは、實に此の信念の賜である。

然るに、世の多くの人々は、唯、生活問題とか、職業問題とか、

或は名譽、或は功利のために焦り、多少の蓄積、聊かの地位を得れば則ち成功と観ず。かくの如きは輕薄なる虛名物慾に過ぎず、人、こゝに執着せば道義の念衰へて必ず信念の力は湧き出ぬのである。「一粒程の信念があれば、此の山に移りて彼の海に入れといふことも其の如く成らん。」と聖人が云ふたのも、「我れに動かざる挺子を與へよ、我れ能く世界を動さん」といふたのも、みな此の信念の力を力説したものであらう。

人生の高所より觀、深き自己心底より湧き出づる信念、自己の使命に對する確信、是れ頓て我が本心の中核を貫きて天地の實在に到達し、宇宙の本體に連りて終に山をも動かすの力となるのである。此の力の發見體得こそ、實に人間の人間たる所以で、凡ての發明發見、凡ての宏業偉績、皆その根抵を爲すものである。

## 七 人生の最大發見

自己は宇宙の縮圖

自己は宇宙の縮圖である。宇宙を知る智識も、宇宙を支配する力も、本來自己に具備してゐる。森羅萬象、天地萬有、一として人間に於て知り得ざる處なく、支配し得ざるものなき時代が、將來、到來すべきことは、最近の物心兩界の進歩に徴して、疑ひなき所である。唯、その實現の時期が全く未知なるに過ぎないのである。曾ては夢想たに及ばざりし無線電信、飛行機、ラヂオ等の發明が、次から次へと實現して行くのは、やがて人類が宇宙を究め盡し、之れを支配する時代を將來に暗示するものである。而して、この發明發見

は、皆人間本來に具備する潜在力の活動の結果に外ならないのである。

### 教育の第一過程

今日一般に、教育といへば、蒙を啓き智を進め、體を鍊り、人格を向上せしむることに盡きてゐるが、その根本に於て一過程あることを忘れてはならぬ。即ち、本來人は何れ丈け教育し得らるゝ素因があるか、向上し得べき可能性があるか、先づ此の點に於て何等の自覺も信念もなき時は、教育は一の空理空論に終るであらう。已れの様な人間には、何も偉い事は出来ぬ、自分はつまらぬ人間である、全然、自己に自信なき者は、如何に學問しても、如何程書籍を讀んでも、又如何に教育を受けても、何の役にも立たぬ。故に、汝の魂には偉大なる力が潜在してゐる。無限の力を包藏してゐる。汝は唯それに氣付かずにあるのだと、一大暗示を與へて以て奮起を促

### 多くの貴族富豪の子弟

すことが、教育の第一過程である。今日の教育は此の點を閑却してゐはしまいか。故に、學問を多くした者に、往々にして、見るからに意氣消沈氣息奄々たるものがある、而かも最高學府を出た人に、氣魄衰へて、既に早く社會に吞まれてゐる者が、割合に多く見受けらる。殊に貴族富豪の子弟に、人格識見殆んど見るべきものなく、廢人同様なものが多いのは、全く此れが爲めである。蓋し、彼等の子弟には世襲的の爵位あり、傳來の巨富あり、周圍は彼等に媚び諂ひ、虚榮心の満足には何一ツ不足なく、従うて奮闘努力の必要もなく、精進工夫の氣力もなく、彼等の人格識見の磨かれざるは、まことに當然といふべきである。之れよりすれば、反つて物質に恵まれざる者こそ幸といふべきである。彼の勞働運動の如き、一面には随分缺點はあるが、彼等が生活苦のために努力奮闘し、體は強く意は

鍊られ、知らず知らず人生の大鍛鍊を経居ることは、富貴の子弟に比して天地の差ありと云ふべきだらう。將來、彼等勞働者は驚嘆すべき大勢力となるべきは、豫想に難からざる所である。多くの世の富者は子弟に富を残すと同時に、魂を貧乏ならしめて居る。多くの貴族は爵位を傳ふると同時に、人位を卑しめてゐる。人間の人間たる所以は、富にあらず、爵祿にあらず、高位高官にもあらず、實に自己の発見、自己の姿を見つむる事にあるのである。自己の内部に潜在する力を遺憾なく發揮することにあるのである。

二粒の種子が蒔かれて數百年を経、一は亭々として天を摩し、遺憾なく喬木の壯觀を呈し、一は僅か數尺にして風雪のために枯れ凋むも、共に同じ種子である。種子内在の力は本來同一である。然るに、斯くも大なる差を生ずるのである。人間に於ても、自己の可能

## 二粒の種子

性、内在の潜在力を遺憾なく發揮すること然らざるにより、同様の差を生ずる。三軍を指揮し得べきものも伍卒に終り、大會社大銀行を統率し得べきものも一介の下級社員に終る。大発見大發明をなし得るものも碌々としてその生涯を終り、宰相たる器にして俗吏に終る。已れにこり社會にこり、之れ程の恨事はあるまい。是れ皆已れの器を知らず、才幹を知らず、潜在力を覺らず、自分はつまらぬ者到底人並の仕事も出来ぬ者と、自ら蔑すむ結果に外ならぬ。若し人各自の天分を遺憾なく發揮し、潜在力を完全に活用し得んか社會は忽ち理想郷と化し得るであらう。

教育の根本問題は、人各々の潜在力を自覺し、可能性を発見し、遺憾なく之れを發揚し活用するにある。即ち、自己を完全に発見し活躍せしむるにある。封建時代の特色は人をして此の力を發揮せし

## 潜在力の自覺



## 封建時代の因襲

めざる事にあつた。百姓の子は百姓、町人の子は町人、足輕の子は足輕、百石取りの士は子々孫々にまで百石取りであらねばならなかつた。此の因襲は明治維新後に於ても、尙ほ且つ牢として抜くべからざるものありて、機會ある毎に覺醒せんとする、青年に、蟹は甲に似せて穴を掘れ、無暴の企ては爲すべからずと、其の發展を抑制するを以て賢明の途なりと誤認する者少からずあつた、誤れるも甚しといふべきである。自己の甲は無限に大である。種子は喬木となるべき可能性を包藏する。思ふ存分自己を尊重し、之れを鞭撻し、之れを發揮し、自己本來の面目を貫くべきである。是れ、眞の教育である。茲に靈眼一度開かば、最早、貧も貧にあらず、苦も苦にあらず、困難も困難にあらず、悲境も悲境にあらず、是れ皆自己発見の手引きであり、自己完成の良藥である。如何なる境遇も、如何な

## 人は不可能事を空想せず

る災難も、突破する金剛力が湧き出づるのである。かくて、一粒の種子が亭々として天を摩する喬木となるが如く、吾人の人格力量もスク／＼天に向つて成長發達するのである。

精神病者でない限り、人は不可能とする事を心に描く筈がない。無から有は生じない。到底成し遂げ難き事をやつて見ようとするが如き考の頭に浮び出づる理由はない。人の頭に浮び出でたる考は恐らくは總べて出來得るものだらう。その初めこそ空想の如く見ゆるここでも爲せば屹度出來る。少しく大なる事業は、皆なその初は空想の如く觀られ、遂に成就したものである。

## 敬愛の理想

敬天愛人の大理想即ち校名敬愛の高嶺は、遙か彼方の雲表に聳え登攀容易にあらざるも吾人内在のこの自覺心に鞭ち、進み進んで止まざる時は遂に高嶺の名月融合歸一の聖域に到達し得らるゝことを

堅く信ずる。吾人は我が校青春の男女學生と共に手を取り此の理想の高嶺に進みたいのである。

## 八 公人の態度

### 公私混淆

公私混淆は日本人共通の一大缺陷である。我が國の社會上に於ける万般の失策は、詮じ詰めれば其の大半は此處に起因するもの、殊に政治界に於ける腐敗墮落、其の大原因は正に此處に在りと思ふ。日本人の出所進退は、大抵、緣故、嫉妬、情實の三者によつて決定せられ、主義主張の相違とか、正邪善惡の觀念とかは、殆んど度外視せられてゐる状態である。彼の人が主張するから自分は反對する、其の主張の正邪適否は之れを顧みずして、只其の人に對する感情によつて賛否を決する。主張された説が國利民福に資するか、

大義公道に則れるか、機宜に適ひたるか等は第二段のごとし、先づ、主張する者が自分に縁故がないとか、或は癢に觸るとかいふ様な、極めて低級な感情によつて動く。私人ごしてならば、情實、縁故、感情の交錯することは交際上已むを得ぬことであらうが、私人ごしては大禁物である。如何に感情に於て面白からぬ處があればこそ、公正の主張に對しては賛成すべきである。如何に情誼、縁故深ければこそ、不當不法の主張に對しては、斷然反對せねばならぬ。是れ、公人の公人たる所以である。然るに、日本人は動もすれば公私の別を混淆し、私人間の情實、縁故等を以て、私人ごしての出所進退の標準ごしてゐる。政治界を初め社會萬般の腐敗は此處に原因してゐる。

模範的公人

今、私人ごしての模範的態度に就いて、二三を述べて参考に供し

西郷隆盛

たいと思ふ。

維新の元勳西郷隆盛は英雄豪傑には相違ないが、寧ろ隆盛の偉大なりし點は日本人の中で最も完全に近い人物であつたことである。維新の間際に、平野次郎なる者が突然西郷の顔を擲り付けたことがある。天地を包藏する底の大度量の西郷も、此の時ばかりはサツと顔色を變へた。然し、彼の平野が皇室の衰微を憤慨し、徳川幕府を倒し尊王の大義を天下に布きて、早く萬民を天皇の民ごせざるか、御身の如き大人物が何を愚圖／＼して居るかご、赤誠を籠めて且つ慨き且つ訴ふるに及んで、西郷は兩手を突き頭を下げ、辱けないごいうて兩眼に熱涙を浮べ、平野の直言を謝したごいふ。何たる大度量であらう。何たる大至誠であらう。又、裁判官の島本某なる者、衆人稠座の中に於て西郷を面責し、汝の同志は或は獄に繋かれ或は

暗殺され、殆んど生を完うしたものが無い。然るに、汝のみは一人陸軍大將、維新の元勳なりとて、空威張りしてゐるのは人非人である。同志に相濟まぬとは思はざるか、猛烈に攻撃した。西郷は頭を下げ黙然として一語も發せず、一座は白け渡り、そのまゝ散會した。翌日、西郷の幕下等は西郷邸に押しかけ、盛んに島本某を罵倒し、司法省を追ひ出せの、殺して了への、と騒いだ。時に、西郷は「お、あの人が島本さんであつたか、實に立派な人物である。何とも辯解の辭はない。あゝいふ人が司法省にゐる間は日本の裁判も安心である。」と心から感歎した。幕下等は今更ながら西郷の偉大にして至誠天を貫く底の人物であるのに感激したといふ。(選山藩先生大西郷遺訓の要旨抜萃)

明治十年、西南の戦争の際に、西郷は味方の敗北する毎に鎮臺兵の強きを見て、ニツコリと笑を浮べて居たといふ。これ百姓町人が

ピューロ  
公の追  
懐談

ら急造した鎮臺兵が、亥の歳以來養ひ來つた薩南の健兒に劣らぬのを知つて、日本の將來に對して大いに意を強うしたのであらう。南洲の心底には敵味方の區別なく、唯、大和民族と日本の將來とあるのであつた。西郷が、「廟堂に立ちて大政を理するは、天道を行ふものなり。故に公平無私、正道を踏み」云々「是れ即ち天意なり。」と喝破された其の至誠宏量は、正に公人たるもの、模範といふべきである。永く獨逸帝國の宰相たりしピュートルー公は、引退して一書を著したがその中に次の様なことが述べられてある。(某政治家述)

ピューロ公の先輩で公が師事してゐたホーヘンロー公が巴里駐劄大使であつた時、公は青年ピューローに對し、ババリア國の一名士につき、其の品性の高潔なること、性質の温良なること、才學の優秀なることを擧げて、常に激賞してゐた。其の後、偶々同國に於

て宰相の缺員あり、ホーヘンロー公の推薦を待つことゝなつた。處が、公は平素賞讃してゐた親友の某名士を推舉しようとはしなかつた。ピューロー公は、餘りの不見識に堪へかねて、苟かに其の理由を訊したところ、ホー公は嚴肅なる態度をもつて、某名士はまことに立派な紳士ではあるが、宰相たるの器ではない。一國の宰相たるべき者は、剛健なる精神、斷乎たる勇氣、英邁なる才幹を備へ、時には成敗を眼中に措かず、乾坤一擲の大度量がなければならぬ。然らざれば到底一國の大事を托し、偉績を擧ぐることは出来ぬ。某名士は立派な人格にして學深く材秀で、申分なき政治家ではあるが、未だ宰相の器に非ずと答へた。公私の別截然たる、實に味ふべきである。

リンカーン  
の選挙

リンカーンとダグラスの上院議員選挙競争ほど、興味ある選挙は

餘りあるまい。當時、リンカーンは已に四十九歳に達したが、志未だ成らず。政治家として黨閥もなく乾分もなく、財力亦極めて乏しく、名聲未だ他州に聞えざる一介の田舎辯護士に過ぎなかつた。之に反し、ダグラスは政界の風雲兒、彼より若きこと四歳、二十一歳にして既に早くもイリノイス州の検事總長となり、次いで、州會議員となり、高等法院の判官となり、下院議員となり、更に上院議員たること既に十一年に及べる、天下知名の士である。權謀術數に富み、黨人の操縦に長じ、加之、金持ちといふのであるから、兩者の勝敗は争はずして最初から明らかである。故に、友人は皆口を揃へてリンカーンの出馬を諫止したが、人道と高き理想より、ダグラスの如き權謀政治家が米國政界を支配することは、前途に一大暗影を投ずるものであると爲し、且つ當時奴隸問題に付き、起つた南北戦争

の間際のこと、て「我れは唯正義の爲めに戦ふのみ」と絶叫し、敢然として、強敵ダグラスを向ふに廻し、一騎打の論戦を挑んだのであつた。二人は州内の要所々に於て、論戦すること七回に及んだが、この時、聴衆は或は車を驅り或は馬に跨り或は徒歩により、四方より蝟集し來つて、晝は狂奔し夜は焚火を爲し、原野に露宿してあだかも軍隊の野營の如き有様を呈した。而して、ダグラスは常に特別仕立の列車にて多勢の與黨と樂隊を率ゐ、また大砲を搭載して到着毎に發砲し、威風堂々あたかも凱旋將軍の如き觀があつた。一方、リンカーンの遊説振りといへば、極めて質素にして、鐵道會社は彼れに何等の便利を與へざるのみか、却つて其の運動を妨害することすらあり、其の爲めに彼と彼の同志は牛馬の如く貨車に搭じて行くことすらあつた。ダグラスは八萬弗の運動費を擁し、リンカ

ーンは五百弗の用意しかなかつた。リンカーンの友人は、焦慮の餘り、彼にダグラスの如く誇大なる宣傳と場當りの煽動演説を爲す様勧めたが、彼は「我れは唯聴衆を喜ばせて喝采を博するが目的でない。國民をして正理の存する所を知らしめん」とて、友の勸説に應じなかつた。彼は田舎出の素人政治家に過ぎなかつたが、上院議員の選舉の如きは既に眼中になく、廣く合衆國民に對して、正義公道を明らかにせんとする大志を包藏してゐたのであつた。果然ダグラスの奸策陋手段は圖星に當り、上院議員の職は遂にダグラスの獲得する處となつた。然し、勝敗は之れによつて決せられたのではなかつた。リンカーンの正論堂々として些の虚飾なく、眞に國士の倂を發揮し、何等の權謀術數を弄せなかつたことは、敗れて猶且つ天下の輿望を負ふことが出來た。ダグラスの心底陋劣なることは

聽て國民の觀破する處となり、千八百六十年、第十六代大統領選舉において、その榮冠はリンカーン其の人の占むる處となつた。其の時彼の政友は喜び極つて盛んに祝杯を舉げたが、リンカーンは常と變るところなく、禁酒の習慣を破らなかつたといふ。後日、ルーズベルトは兩者が論戰の跡に記念碑を建立したが、正邪の結果は正に斯くあるべきである。

今や、我が國も普通選舉となり、女子參政權も近き將來に實現さるゝ趨勢にあり。知事の公選も亦遠い將來であるまい。(明治二年五月十二日官公吏公選の御詔勅があつた。)陪審制度の實施は確定された。斯くて立法、司法、行政を通じて、國民總掛りで國務に干與することゝなつた。時勢は既に轉じてゐるのである。從來の如く買収と強迫と虚偽の宣傳を以て、選舉に於ける唯一の武器とするが

如き時代は去つたのである。公人としての出所進退を決するに、情實緣故等を以て唯一の標準とするが如きは低級の政治家の爲す所である。飽くまで正しき主張、公正の道理に従ひ、是非の判斷を誤らざらんことを心掛け、共に俱に社會國家の安寧幸福を所期すべきである。西郷南洲といひリンカーンといひ、ビュロー公の懷舊談といひ、我れ等に取つて好個の模範とすべきである。

最後に畏れ多くはあるが、我等の崇拜の中心たる。明治大帝陛下の憲法御制定當時の御様子を申しあげ、公人として眞の典型を仰ぎ奉つて見たいと思ふ。(以下は金子千爵の講話である)

茲に謹んで諸君に御報告すべきことは、明治天皇陛下の御精勵遊ばされたることで、いかにも恐懼に堪へぬ次第であります。五月から十二月までの會議には毎回臨御になり、一回たりとも御缺席は無

明治大帝  
の御盛徳

い。而して、會議が濟んで入御になると、侍従を以て吾々書記官に命じ、其の日の會議の修正は悉く御手許の草案に書き込んで、其の夜の中に出せといふことであるから、吾々は居残りをして決定になった箇條を朱書にして、陛下の御手許に差出すと、陛下は之れを御研究になつて、若し其の箇條につき御思召がある時は、翌朝伊藤議長を召されて、一々御下問がある。或る時には、何々顧問官がある、いふ議論を唱へたが、あの論はもう少し研究したら宜からうといふやうな御沙汰が、伊藤議長にあつたこともある。陛下が各條各項に就いて、熱心に御研究遊ばされたことは、吾々は常に目撃して實に恐懼に堪へなかつた。又七月の炎天の時になると、樞密院の會議室は丁度日向きであるから午後になると椽側から向ふの襖の所まで西日が射し込み、或る時の如きは陛下の御膝から御足の先まで、強い

西日が射し込み、私共は何うしたら宜しからうと思つゝるけれども陛下は何とも御沙汰がない。さうすると、黒田總理大臣が立つて行つて、戸を締めて陛下の御足に西日が當らぬやうにされるまでは何とも御沙汰がなかつた。斯くまでに、暑さも御忘れになつて會議を御聽き遊ばれたといふことは、吾々これを目撃したものは實に恐懼に堪へぬ次第であつた。尙それよりも一層恐れ入つたる次第は、或る日の會議中のごさいましたが、侍従が周章して會議室に入り來り唯今、皇子が御大患で薨去になつたといふことを内奏した。依つて伊藤議長は直ちに入御遊ばしては如何で御座いますかと申しあげると、陛下は議事中の一個條だけ続けよといふ御沙汰であつたので、議長は其の議事を續けられた。然るに、顧問官は何の爲めに侍従長が來て陛下に内奏したかは知らぬため、滔々と議論をした。而して



其の箇條が議決し終つて次の條に移らんとする時、唯今、皇子が薨去遊ばされたに付き、陛下は直ちに入御になるから、今日の議事は是れで終ると議長が宣告された。其の時吾々が陛下の大御心を拜察し奉るに憲法會議は天子の公事である。是れに臨ませらるゝは國家の公職の爲めである。而して皇子の薨去は皇族の私事である。私事を以て公事を左右せずこの公私の區別を、陛下が確然と御示しになつたのである。是等を追憶すれば、如何に明治天皇が憲法制定に大御心を寄せられたか、吾々今日に至つて實に聖徳の有り難さに感泣せざるを得ないのである。と。

若し吾人にして、我等の尊き明治大帝陛下の大御心を御手本として、臣下の本分を我が國家に盡しなば、必ずや公人として大過なからんと、堅く信ずるのである。

## 九 公民教育の一面

五個條の  
御誓文

明治維新の大業は、其が餘りに大なる變革なりしがため、民心は一時其の歸趨に迷ひ、恰も、破船の激浪に翻弄さるゝが如き状態を呈した。此の時に當りて、明治大帝陛下には五個條の御誓文を公布せさせ給ひ、

廣く會議を興し萬機公論に決すべし

舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし

と御宣言遊ばされ、封建制度を打破して、立憲制度の大精神を確立し、立所に、不安の民心を安定統一なされた。其の達識卓見、當

に神授と申し上げた程である。此の立憲の大精神の確立と共に、之れが實現は着々として進められ、明治四年七月藩を廢して縣を置き、明治廿一年四月地方自治制を布き、明治二十二年二月帝國不磨の大典たる憲法を發布せられ、明治二十三年十一月帝國議會の開設となつた。其の他萬般の法律制度、相前後して夫れ／＼制定さるゝに至つた。而して、明治二十三年十月三十日御下賜の教育勅語には

國憲を重じ國法に遵ひ

この大鐵案を下し給はつたのである。明治大帝陛下の大御心が實に立憲的に在らせられたるは、推し奉るだに畏き極みである。然るに、時の爲政者は如何の態度を以て、國民に臨んだか。其の爲す處殆んど非立憲的にして、遂に國史に千載の恨事を遺すに至つた。即ち五個條の御誓文の大精神を根幹とし、凡ての文物制度は立憲の大

爲政者の  
非立憲

義に則りて樹て直されたのにも拘らず、廟堂に立つ爲政者は依然として舊來の陋習を墨守し、國民をして立憲的智識訓練の機會に觸れしめず、所謂、由らしむべし知らしむべからずの方針を改めず。この弊風は、永く歐州戰爭終了の後までも繼續されたといふことは、眞に驚くに堪へたる次第である。

立憲的智識及び訓練即ち公民的教育は、我が國に於ては、遅くも明治二十年前後、即ち諸般の法律制度制定の當時、行はるべきものであつた。然るに幕府の倒壊に最も力を盡したる薩州長州は、國民より感謝の聲を聞きつゝも、何時の間にか幕府の二の舞を演じ、所謂藩閥なるものを作りて廣く多數國民の聲を聽かざるに至つた。かくして藩閥は歩一步その横暴を逞うせんごせしも、既に立憲的施設の動かすべからざるものあれば、いかでか憲政の根本を覆して國家の

藩閥と官  
僚の政治

大勢に逆行するを得んや、久しからずして彼等の勢力は衰へたるも、やがて官僚政治は之れに代りて現れ、藩閥の遺鉢を受けて、依然、由らしむべし知らしむべからざるの陋策を守り、國民一般に公民的教育を施さず、立憲的訓練を封じたる爲め、政治的道德の發達せざるは勿論、經濟上、社交上の協力一致に至るまでその効果を完うせず、憲政は嚴として存するも、國民の多くはその大精神を解せず、帝國議會の年々招集せらるゝも國政參與の本義を果さず、町村の自治亦その眞意に疏く、公民の本分と職責とにつきては殆んど無知低能であつた。これ悉く爲政者の國民をして知らしめざるの罪なるか、見よ、小學校教員にして、政治を談じ、自治を論じ、國民としての本分を發揮せんか、忽ち職を奪はれ、學校を追はるゝに至るが如きは、寧ろ當然の事として人の敢て不思議とせざる處であつた。斯く

の如くにして、歐洲戰爭當時まで、我が國の政治は「廣く會議を興し萬機公論に決すべし」この精神に悖り、依然として「舊來の陋習」に捉はれ、「天地の公道」に基かず、幕府は倒れて維新となりたるも之れに代るに藩閥の政治、官僚の政治となり、唯、時勢の進運より野蠻的專制政治の開明的專制政治に變形したるに過ぎざる状態であつた。

現今、日本に於て、政治上諸般の墮落、其他凡百の腐敗原因は、過去に於ける藩閥政治、官僚政治の致す所立憲的智識及び訓練の缺如する所、國家の選良は眞の選良に非ずして、終に憲政の美を發揮する能はざるが故である。今日、選舉といへば投票を買収するものと心得、自治といへば情實の纏綿するものと心得、議員といへば利權を漁るものと心得、政黨は自黨あるを知りて眼中國家なく、黨利

墮落腐敗  
の根源

黨勢にのみ汲々たるものと心得るに至つたのである。勿論、中には若干の例外はあらうが、國民一般の眼には斯く映じて居るのである。

近時、普通選挙の制、定まるに及んで、倉皇狼狽して公民教育を勸説し、その及ばざらんことを懼れてゐるがやうである。昨の非は今の是、國民は冠を取りて足に穿ち、周章して闇路へ走り出でんとしてゐる。それにしても、今は小學校の男生徒たるご女生徒たるを問はず、一般に公民教育を施すの機運に向へるは、洵に大慶至極の次第である。唯、我が國の公民教育實施は、既に三四十年も立ち遅れ、弊風陋として抜く能はず、之れが改善徹底には非常の努力を要するのである。かの米國が幾多の缺點あるに關らず開國僅か百五十年に過ぎざるに、今日の隆盛を致せるは、統治上に於ては全く公民

## 少年市長

教育の賜によるものにして、我が國の範とすべきであると思ふ。彼のサンフランシスコに於ては、毎年四月二十六日より五月二日までの一週間を少年週間と稱し、此の期間少年の手によつて出來得る範圍の同市諸般の事務を取るべき少年市長を選挙することになつてゐる。即ち、同市にある五十有餘の小學校並に各教會は、それ／＼市長候補者を指名し、之れを審査して合格せる少年は、少年市長として市役所に一週間出勤して、市長事務を執るのである。斯くの如く、彼の國に於ては、小學校時代より公民教育を實際に及ぼして訓練せしむるが故に、上は大統領の選挙より、下は警察官の選挙に至るまで、統一整然として亂るゝことはない。殊に、彼の國の如く、各國より出稼人の蝟集したる國に於て、此の整然たる選挙を行ひ得るは、全く公民教育の徹底せるに據るものといふべきである。

ルボンの  
評言

果して、日本人には自治立憲の政治が適せるや否や、甚だ疑問である。之れに就てルボンが英人と佛人との性格を比較せる話は、以て我が日本人にも當て筈めらるゝと思ふ。ルボンは英佛兩國人を評して曰ふ。「若し、突然の洪水に襲はれた時、英國民なれば、堤防附近の人民は警鐘を鳴らして村民を集め、互に一致協力して及ぶ限りの應急手段を講じ、然る後に村役場に向き、堤防の修繕を要求し官民一致して再び破壊されぬ様努力するであらう。然らば佛國民は如何といふに、堤防破壊せる附近の住民は、狼狽して應急手段を講ずることを知らず、直ちに大舉して村役場に押し掛け、村役人の庇護を求むるであらう。」と。まことに兩國民の性格を言ひ現はして妙であるが、我が國民も此の點に於ては、佛國民に酷似してはゐないか。人民の生活に直接交渉を有する事務は、假令夫れが町村の事務

であらうが縣の事務であらうが、單に役所にのみに頼らず、出来るだけ自分等で一致協力して遂行すべきものなりとの英國流の考が果して日本人民に徹底し居るや甚だ疑問とせざるを得ない。

我が國に於ても、立憲政治の布かれたる當時、即ち今より三十餘年に早く此に着眼し、公民教育を施したらんには、今日の如き弊風を醸成すべからざりしに、如何せん、政治の局に當り社會運用の衝に居る者が封建的氣質を以て立憲政治を律せんとしたるが爲め遂に今日の如き腐敗墮落を見るに至つたのである。幸に、歐洲戦後漸く爲政者も國民も此に覺醒し立憲的精神を以て政治の運用をなさんとする氣運勃興し、公民教育の必要を痛感するに至つたのは、遅れたりと雖も、誠に喜ばしきことで、上下協力以て其の方法に誤りなからんか、立憲の精華を發揮すること、決して難事ではないであらう。